

樽味地区の遺跡の概要

石手川の中流域南岸沿いには、東西800m、南北200mの微高地が広がっています。この微高地上では、これまでに松山市や愛媛大学等による埋蔵文化財の調査がおこなわれてきました。この調査の多くは、開発工事に先立って行われる記録保存を目的とした発掘調査ですが、松山市では、平成15年度以降、学術目的の「樽味地区重要遺跡確認調査」を継続的に実施しています。

微高地上で発見された遺跡からは様々な考古学的情報が得られています。発掘調査は野外で実施する発掘作業と、室内で行う整理等作業があります。整理等作業では、発掘作業を通じて得られた記録書類（測量図や写真など）の整理と分析に加え、現地で出土した土器や石器などの遺物の基礎整理（洗浄・注記・接合、実測図の作成）と、分析・考察があります。この整理等作業を通じて調査の事実関係をまとめたものを「松山市文化財調査報告書」として公開しております。

報告書を参考にすると、石手川中流域南岸の微高地では、これまでに5遺跡50地点以上の記録保存を目的とした発掘調査が実施され、データの蓄積がおこなわれてきました。このデータからは、微高地上に初めて遺跡（遺構と遺物で構成される）が出現するのは、今からおよそ3,000年位前であることが明らかとなっています。以下、時代毎に主な遺跡の概要についてまとめます。

〔1〕 縄文時代（晩期）：今からおよそ3,000年位前

樽味立添遺跡3次からは、人々が食料などを蓄えるための穴蔵（貯蔵穴）群が見つかったほか、東野森ノ木2次や同4次からは同時期の土器片が発見されています。微高地の中央北東寄りでは貯蔵施設が確認されたことから、縄文人がこの地で「定住生活」をおくっていたことが明らかとなりました。

〔2-①〕 弥生時代（前期）：今からおよそ2,500年位前

樽味四反地遺跡7次や樽味立添遺跡3次からは区画を目的とした溝が見つかりました。樽味立添遺跡3次の溝には環壕の可能性が高いものがあります。最大で幅3.6m、深さ1.2mを測る大規模なものです。この時期の樽味地区には大規模な環壕を設けることができる中核的な集落が成立していたと考えられます。

〔2-②〕 弥生時代（中～後期）：今からおよそ2,000年位前

樽味四反地遺跡5次や樽味高木遺跡2次からは竪穴建物（住居）が見つかりました。大型の住居は復元直径9.2mの円形プランで、5本の主柱で屋根を支える構造です。小型の住居（建物）は一辺が2.7mの方形プランの可能性のあるもので、この時期の竪穴建物（住居）には、大型円形と小型方形とがみられます。さらに、樽味高木遺跡9次では1間×2間の掘立建物（高床倉庫）や隅丸方形プランの穴倉（貯蔵穴）が発見されており、微高地の中央から西にかけては居住や貯蔵の施設が展開していたとみられます。

〔2-③〕 弥生時代（後期後半～終末）：今からおよそ1,900～1,750年位前

樽味四反地遺跡4次や樽味立添遺跡1次などからは竪穴建物（住居）が見つかりました。注目されるのは他地域との積極的な文化交流のあったことを示唆する稀少遺物がいくつも確認されていることです。樽味立添遺跡1次からは中国の新王朝時代の貨幣『貨泉』の完形品、樽味高木遺跡3次からは船を描いた絵画土器片、東野森ノ木遺跡2次の竪穴建物からは袋状鉄斧や鑿などの鉄器のほか、勾玉も見つかりました。なお、微高地から一段土地の低い南西側に所在する東本遺跡4次からは中国製（舶載）の鏡片が見つかり、平野内でも特に有力な集落が樽味地区周辺に存在していたと考えられます。

〔3-①〕 古墳時代（前期初頭）：今からおよそ1,750年位前 ★

微高地の南西端付近に立地する樽味四反地遺跡6次・8次・13次から、とても大きな掘立柱建物が合わせて3棟見つかりました。いずれも通常の大きさをはるかに上回る規模（床面積）で、柱筋の交わる場所全てに柱がある「総柱構造」の高床建物です。8次で見つかった最も立派な建物（超大型建物）は、床面積が160㎡を超え、建物周位には「庇（縁）」を伴います。さらに、建物中央には棟持柱があり、屋根を支える柱の大きさは直径が40cmにも達します。これらの諸特徴を総合すると、この建物は平野を統括していた大首長の最重要施設と考えられ、この樽味地区には西瀬戸内における権力者の出現契機や過程を含め、当時の社会構造を考える上で、とりわけ重要な遺跡が存在していました。調査及び研究の課題は、当時の景観や関連施設の広がりを明らかにするとともに、遺跡が成立した歴史的背景などを具体的に検証することです。

〔3-②〕 古墳時代（中期前半）：今からおよそ1,600～1,550年位前

微高地の中央部と南西部には渡来人の住まいが見つかりました。樽味四反地遺跡9次からは、6.5×5.4mの長方形プランの竪穴建物（住居）が見つかりました。壁立ち構造で、住居内には間仕切り溝が伴います。住居北壁の中央には造り付けの竈がみられました。土師器には甕・壺・高坏のほか甗がみられ、外面に「格子叩き」を施した、いわゆる軟質土器が伴っていました。

〔3-③〕 古墳時代（中～後期）：今からおよそ1,500年位前 ※

微高地の中央部から南西部に集落が広がっています。中央部の樽味高木遺跡9次では一辺5m程度の中型住居と、一辺4m程度の小型住居とが確認されています。今回の調査地の北東隣接地に所在する樽味四反地遺跡6次・13次・21次からは総数約50棟の竪穴建物が確認されています。遺構密度はきわめて高く、微高地南西部の高台が主な居住域のひとつであったと考えられます。

〔4〕 奈良時代～平安時代：今からおよそ1,300～900年位前

微高地の中央南端に所在する樽味四反地遺跡5次では、自然流路（川）から須恵質の硯が4個体以上見つかり、周辺の高台には文字を書くことのできる古代役人の勤めた役所施設が展開していたとみられます。

〔5〕 鎌倉時代～室町時代：今からおよそ800～400年位前

微高地の各地に遺跡が確認されています。なかでも愛媛大学農学部キャンパス内の樽味遺跡2次で確認された14～16世紀の集落関連遺構は注目されます。このほか、東野森ノ木遺跡1次からはほぼ完形品の白磁の四耳壺が埋納されたまま見つかりました。希少価値の高い貿易陶磁器の完形品が確認されたことで、微高地の北東部には階層性の高い集団が存在していたと考えられます。

〔6〕 江戸時代：今からおよそ400～130年位前

微高地の各地に遺跡が確認されています。平成7年度に調査された樽味高木遺跡4次からは、寛永通宝10枚がワラで束ねられた状態で見つかり、地鎮に関わる祭祀行為が行われた可能性が考えられ、当時の精神性をうかがい知る手がかりが得られています。

■このように、主に樽味地区に広がる微高地には、いにしえの人々の生活を営んだ跡（遺跡）が良好な形で残されています。発掘調査及び研究の進展により、この地の人々は縄文時代晩期からすでに定住生活を始めていたことが確認され、石手川中流域南岸の微高地が居住域として活用されていたことが明らかになってきました。調査成果で特筆されるのは、平成10年度以降、微高地南西部において古墳時代はじめ頃の大型建物（床面積100㎡以上）が相次いで発見されたことです。これにより、大型建物が成立した古墳時代はじめ頃、樽味地区には大首長に関係する最重要建造物の存在していたことが明らかとなり、古墳時代開始期における首長層の成立過程を考える上で、全国的に「まつやま」が注目されるようになりました。